市民が主役

はたおりの技術を習得し 次世代へ伝承する

はたおり伝承の会 会長　藤本京子さん・会員の皆さん

※「市民が主役」は今号で最終回です。取材へのご協力・ご愛読いただきありがとうございました。

裂織りとは、使い古した布を細く裂いてひも状にし、それを緯糸に使用した織物のことで、ものを大切にする精神から始まったとされています。

清瀬でも昔は機織りを行っていた家が多く見られ、裂織りを織っていた方もいらっしゃいました。織機を使い一点一点手作業で作成した作品は、独特な風合いや手作りのぬくもりが感じられます。

今号は、清瀬における機織りの技法を守り伝えている、「はたおり伝承の会」の会長　藤本京子さんと会員の方々にお話を伺いました。

はたおり伝承の会は、郷土博物館が開館した翌年（昭和61年）、市民の方が寄贈された高機などを使用して開催した「裂き織り講習会」からスタートしました。

この催しは大変好評で、その後、講師の呼び掛けにより「高機サークル」が誕生しました。現在、「高機サークル」は「はたおり伝承の会」と名称を変え、博物館の収蔵品である高機を使用してコミュニティプラザひまわりで活動しています（※）。会員数は約30人、活動日は主に水・金曜日です。

藤本さんは会員の方々と、「当時の技術を伝承していく」という使命を全うしながら、「体験はたおり」や「昔のくらし体験」などの催しで裂織りの指導をするなど、郷土博物館の行事に協力しています。また、毎年開催している企画展「染める・織る・縫う」では、会員の方々が制作した作品を展示しています。

※はたおり伝承の会の活動場所は、高機サークル結成当初から郷土博物館伝承スタジオでしたが、平成23年6月より「コミュニティプラザひまわり」に移動しました。

糸が布になるまで

―裂織りはどのような工程で織るのですか？

織るまでの準備には、おおまかに①糸の計算②整経③仮筬通し④千巻き⑤綜絖通し⑥本筬通し⑦男巻結びつけなどの工程があります。

まず、糸が不足したり無駄になったりしないように計算し、糸をがまの穂の形に大管に巻きます（写真①）。次に整経です。整経は、必要な本数の経糸を、長さをそろえて巻き付ける工程で、数百本もの糸を整経台に巻き、約20本ごとに糸でまとめてそろえます（写真②）。整経が終わると、仮筬通しです。整経台から外した経糸の束を、仮の筬に1本ずつ通して筬の幅にそろえます（写真③）。

そして、千巻きです。仮筬通しで織り丈や密度を整えた糸を、千巻きにきっちりと巻き込みます（写真④）。その後は綜絖通しです。1本1本の糸を綜絖という針金状の物に通し（写真⑤）、それが終わると、本筬通しです。「筬」というクシ状になった道具に、経糸を通していきます。筬は、織る時に糸を打ち込んでいくために使います。その後、巻き取り棒に糸を巻いていき（男巻結びつけ）、やっと準備完了です。

以上のような多くの下準備が終わって初めて織ることができます。

①大管巻き

②整経

③仮筬通し

④千巻き

⑤綜絖通し

―難しそうに思えますが、初心者から始めて、作成できるようになるまでにはどれくらい期間がかかりますか？

入会すると半年間の基礎講習があり、それが終わる頃にはひととおり織れるようになります。

入会するには、まず郷土博物館で毎年秋に行われる「はたおり教室」への参加が必要となります。そこで裂織りを2メートル織る体験をし、機織りについてもっと知りたいと思った方はどなたでも入会できます。

春までの基礎講習で、先ほどお話しした工程を先輩会員からひととおり習います。一人で織れるようになると、郷土博物館主催で行う、夏の「体験はたおり」や秋の「はたおり教室」の準備や指導をします。自分が習ったことを、翌年次の会員に教えていくことで理解を深め、技術を伝承していきます。

その後は、高機を使い、好きな物を織って作品づくりを楽しむことができます。

親しまれている動態展示

会員による機織り作業は、原則公開していて、「動く展示（動態展示）」として市民の方々に親しまれています。

活動拠点が郷土博物館の伝承スタジオだった時は、小学校の団体見学などでも人気があり、児童からの質問に会員が応じるなどしていました。活動場所がコミュニティプラザひまわりに移動してからは、部屋の広さの都合で、見学の受け入れは少人数に限らせていただいていますが、今後は団体見学なども受け入れたいですし、子どもの体験活動など、興味を持った方が気軽に来てもその場ですぐに体験できるようにしたいです。

「技術を伝承していく」ということは、とても難しいことです。引き継ぐ方がいなければ、その技術はなくなっていってしまいます。新人会員の不足や活動場所などが、今後の課題でもあります。

手提げや上着など、制作した裂織の作品はどれも繊細で美しい

世界にひとつだけの作品

―会員の皆さんは、とても真剣かつ楽しそうですね。

機織りには、どの工程が一番重要ということはありません。始めから終わりまで注意深く丁寧に作業することが大切です。糸は正直なので、粗末にしたり少しでも気を抜いたりすると、それが最後までひびいて最終的に良い布になりません。

「失敗は成功の元」という言葉がありますが、私たちは失敗を恐れずに挑戦し、より高度な物を目指して学習しています。

機織りは不思議なもので、布を見ても仕上がりがイメージできません。完成して初めて作品が分かる「世界にひとつだけ」のもの。だからこそ、完成した時や自分の想像どおりに織れた時はとてもうれしいです。

作品の一部は博物館に

―制作された作品は、郷土博物館で見られるそうですね。

年に1回、清瀬に関する絵柄のタペストリーを制作し、企画展「染める・織る・縫う」にて展示後、収蔵品として寄贈しています。

その他、カードケースやペットボトルカバー、敷物など、裂織りで作ったさまざまなグッズは博物館のミュージアムグッズとして販売されています。「きよせさきおり」グッズの売上金は、高機のメンテナンス費用などにあてられており、清瀬市の文化財の維持・活用に役立っています。

今後も活動を続け、技術を伝承していくために、少しでも皆さんに興味を持ってもらえたらと思います。

きよせさきおりグッズ

企画展　染める・織る・縫う

会員が制作した作品の展示などを行います。

さまざまな色と素材が織りなす模様の楽しさ、和の装いの華麗さをご覧ください。

日時　3月15日(日)までの午前9時～午後5時（最終日は午後4時まで）
場所　郷土博物館
※直接会場へ。
問合せ　郷土博物館
☎493・8585